

「縁・えにし」のよろこび

各法要とも、コロナ対策を徹底して開座しました！

～秋季・彼岸会～（2020年9月18日）

昼席・夜席の2座のご縁でした。ご講師にお迎えした椿先生は、住職が所属しています、布教研究会「法水会」のメンバーであります。日頃より、ご指導をいただいております。



～秋の仏教婦人会法座～（2020年10月21日）

コロナ感染拡大の影響を受け、春の仏教婦人会法座は中止となりましたが、ご法座での久しぶりの再会に、皆さま笑顔のお姿がありました。



～親鸞聖人・報恩講法要（759回忌）～

（2020年11月12, 13日）※昼席のみ

浄土真宗のお寺は、報恩講法要を大切にしています。今回は雅楽の奏楽はありませんでしたが、本堂のお内陣を丁寧にお飾り（荘厳）してお勤めしました。

ご講師の角先生は、何度もお越しいただいておりますが、いつも楽しく有り難い感動のお取次ぎをいただいております。



法座は、どなたでも参拝できます。是非、お寺の本堂で“仏法ライブ”をお楽しみください!!

～次回の“仏法ライブ”（法座）予定～

○春季・彼岸会

（3月17日（水） 昼席：13時30分～15時）

講師：井上浄英 師（当山 住職）



どうぞお参りください!!

ナモ（南無）net

～ちよこっと“テレビ”に出ちゃいました！～

私（住職）の友人に、RKBのカメラマンが居られます。年末の様子を、お伝えしたいとのことでした…。カメラの前、やはり緊張しました～～

- ・12月のお寺の様子（1回目）
- ・年末の除夜の鐘の様子（2回目）

※今回は、コロナ感染拡大の影響で中止も考えましたが、鐘の音だけは、お届けしたいと思い、寺族で撞きました。

ご参拝にお越しいただいた方々には、ご理解賜り感謝申し上げます。



阿弥陀さまからのお手紙

『いのち、そのままにして尊し』

吉村 隆真（熊本県熊本市 良覚寺）

蓮は美しい水辺に咲く花ではありません。汚泥に根を下ろしながらも、そこから少しの泥も混じらずに美しく生ずる珍しい花です。水の上に顔を出した可憐な花に目を惹かれる人は多いでしょうが、汚泥の中で必死に耐え忍んでいる根に心を向ける人がどれだけいるでしょうか？

花が咲いたら、根にも心を向けましょう。蓮の根のように、あなたを汚泥に溺れさせず美しく咲かせるために、限らない存在や事柄が見えない力となつて、いつも水面下で支えてくれているのいからです。

四月八日は、釈尊の生誕を祝う「灌仏会かんぶつえ」です。その誕生を祝福するかのようになり、辺り一面にたくさんのお花が美しく咲き誇ったと伝えられることから、「花まつり」とも称されます。また、竜が天から甘露の雨を降らせて産湯にしたという言い伝えから、誕生仏の像に甘茶をかけて祝います。かわいらしい稚児行列が白い象を引いている光景も微笑ましいものですが、この白象にも意味があります。

約二五〇〇年前、ヒマラヤの麓にあった小さな国の話です。ある晩、その国（シヤカ族）の王妃マヤー（摩耶夫人）は、不思議な夢を見ました。

六本の牙を持った白象が現れて、右脇から身体の中に入って消えてしまうのです。朝になってふと目が覚めると、マヤーはお腹の中に赤ちゃんを授かっていました。当時から、白象は神聖な動物とされており、世にも尊き王子が誕生するということお告げと信じられたのです。やがて生まれた赤ちゃんは「ゴータマ・シッダールタ」と名づけられました。成道の後に、「シヤキヤムニ（シヤカ族の聖者）」と尊ばれたことが、釈迦牟尼（釈尊）という呼称の由来です。

さて、誕生された姿の像（誕生仏）は、右手で天を指し、左手で地を指しています。その姿は、釈尊が生まれてすぐに七歩を踏み出し、てんじょうてん天上天下唯我独尊けいぐいどくそんと宣言されたという伝説によるもの

です。釈尊の偉大さを表現した逸話です。この言葉の解釈はさまざまにありますが、“いのち、そのままにして尊し”という意味で、仏教の価値観の象徴でもあります。学歴・地位・名誉・財力・権力などによって、人間としての価値を決めがちなのが世間ですが、これらは人生の副産物や付属品に過ぎません。王子として生まれ、後にその座を捨てて求道の末に覚者（ブツ）となられた釈尊は、私たちから一切の装飾品や付属品を外して、そのように説かれたのです。

人間の不幸は比べ合えながら始まります。そこには、いつも勝者と敗者が生まれ、優越感と劣等感が交錯しています。お寿司屋さんに入ってメニューを眺めている

と、注文もしていないのに、店からのサービスで甘エビの刺身が出てきたら、ほとんどの人が悪い気はしないでしょう。ところが、同じサービスでも、他の席には甘エビではなく伊勢エビの刺身が出てきたら、途端に妙な気持ちになるはずですよ。比べてみますと、喜べるものも喜ばなくなってしまう。

“一隅を照らすこれ則ち国宝なり。” 恩師から頂戴した年賀状に、比叡山を開かれた伝教大師（最澄）の語が紹介されていました。華道にも「出生」と「情性」という言葉があります。山の木々や野の草花が、それぞれの場所で個性的に美しく咲くように、置かれた環境や居場所で精一杯に生きる人は、自らが輝くと同時に、灯火のように周囲をも明るく温かく照らします。このような人を「真の国宝」とご覧になったのでしよう。お互いを認め合い、お互いが支え合い、お互いに照らし合う世の中であつてこそ、本物の「一億総活動社会」なのだと思われました。「自分さえよければ…」この自分本位な思いとの格闘と葛藤が仏道の歩みなのです。釈尊の生誕を祝いつつ、心開かれた世界への誕生に向けて、少しでも自己中心的な思いからの脱皮を果したいものです。

十二月八日は、釈尊が菩提樹の下でさとりを開かれた記念日「成道会じょうどうえ」でもあります。

（この法話を書かれた吉村先生は、9月の「秋季・彼岸会」のご講師です。）